神様の選び、
心の内を見られる神様

サムエル記上16章1～13節
2022年5月8日
松田 基子 師

聖書には創造主であられる神様が、ご自身に叛いた(そむいた)**人類を永遠の滅びから救う**ことを御計画になり、それがどの様に進められて来たか、如何に**人間の歩み**に**合わせ**て**導いて来られた**かが、記されています。 **神様は**この人類救済のご計画を進めるに当たって、ご**自身に信頼**し、聞き**従う人**を**求められました**。 神様の呼びかけに全信頼し、自分の全存在を賭けて従ったのがアブラハムでした。

アブラハムが、神様に従った事によって、神様は人類救済の歴史を、彼と彼の子孫を選んで進める事をお決めになりました。 アブラハムの子供はイサクです。 イサクには兄エサウと弟ヤコブの双子の兄弟が与えられました。 イサクにしてみれば、自分の家督を継ぐのは、当然長子エサウであると考えましたが、神様は何故か弟ヤコブをお選びになりました。 しかし、それは父を欺し、兄を出し抜いて得たものでした。神様はなぜそのようなヤコブをお選びになったのでしょうか。

ヤコブはその様にずる賢い所がありましたが、神様を慕い、神様の祝福の絶大な価値を知っていて、神様の祝福を追い求め、神様に必死に食い下がり、従って行く人生を送りました。 そのヤコブと一族が、飢饉を逃れてエジプトに移住して四百年後、子孫は増え広がりましたが、エジプトの奴隷の身となっていました。 ヤコブは神様から、イスラエル（神が支配する者）と言う名が与えられ、彼の子孫は、イスラエルと呼ばれました。 人間の目から見れば、イスラエルは、エジプトの奴隷として、エジプトの地に埋もれて行く運命でした。 ところが神様の選びは、人間の目には不思議です。 神様は、ご自身が人類の歴史を導いておられる事を明らかにする為に、人間では考え及ばないことをなさり、ご自身の御計画を進めて行かれました。 神様は、無力なエジプトの奴隷のイスラエルを、モーセを 指導者に立てて、エジプトから救出されました。神様は彼らをシナイの荒れ野に導き、**出エジプト記**19章5節で、契約を結ばれました。 それは、

> 「**今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたたちはすべての民の間にあって、わたしの宝となる。 世界はすべてわたしのものである。 あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる**」

と言うものでした。 イスラエルが持つべき自分達の**存在意義**、その**使命**は、**ここにありました**。

それは、自分達がエジプトの奴隷として、無きに等しい者であったものを、神様は敢えて選び、ご自身の御業に用いて、栄光を表し、世界の祝福の基として、お用いになるのですから、**神様の民に相応しく**、神様に**全信頼**し、神様に**従い**、聖なる神様の民として、**清さを求め**て生きる事が**使命**であることを、自覚する必要がありました。神様は約束の通りに、イスラエルを先祖アブラハムに誓われた、カナンの地に定着させてくださいました。 彼らは自分たちが神様の選びによって守られ、導かれていること、この神様に**のみ従って行く**ところに、自分たちの**使命が**あり、**幸いが**ある事を確信して、進むべきでした。しかし、彼らは現実にふりかかってきた、ペリシテ人や、周辺諸国からの脅威に、目に見えない神様に頼るだけでは心許なく、目に見える勇ましく兵を導き、戦う王を求めました。 神様は不本意ながらも、彼らの求めに応じて、先見者（後の預言者）サムエルを通して、サウルを選び、彼を、イスラエル最初の王として立てられました。

サウルはその神様の選びに対して、**サムエル記上**の9章21節で、

> 「**わたしはイスラエルで最も小さい部族ベニヤミンの者ですし、そのベニヤミンでも最小の一族の者です。 どんな理由でわたしにそのようなことを言われるのですか**」

と答えたように、その初めは非常に謙遜でした。しかし、彼は王位に就くと、自分に与えられた、神様の選びと、使命に対して、その自覚と責任が足りませんでした。 先週のサムエル記上の13章では、強力な戦闘力を備えたペリシテ軍が、今にも攻めて来そうな状況に置かれ、頼みとするサムエルは約束の日にその姿を現さず、人間

的に切羽詰まったサウルは、サムエルが献げるべき、戦闘前の全焼の犠牲を自分で献げてしまうという罪を犯してしまいました。 それはサウルが神様に全信頼していないことの表われでした。
サムエルは**サムエル記上**13章13節で、

「**あなたは愚かな事をした。 あなたの神、主がお与えになった戒めを守っていれば、主はあなたの王権をイスラエルの上にいつまでも確かなものとしてくださっただろうに。**
しかし、今となっては、あなたの王権は続かない。 主は御心に適う人を求めて、その人を、御自分の民の指導者として立てられる。
主がお命じになったことをあなたが守らなかったからだ」

と言い渡しました。

しかし、サウルはその時、悔い改めることをしませんでした。 彼の神様に聴こうとせず、自分の考えで行動する生き方はまた、重大な罪を犯しました。 **サムエル記上**の15章2節で、
サムエルはサウルに対して、

「**万軍の主はこう言われる。**
『イスラエルがエジプトから上ってくる道で、アマレクが仕掛けて妨害した行いを、わたしは罰することにした。 行け、アマレクを打ち、アマレクに属する者は一切滅ぼし尽くせ、男も女も子どもも乳飲み子も、牛も羊も、ラクダもロバも打ち殺せ。 容赦してはならない』」

と命じました。

今日の信仰、倫理感からは、受け入れ得ない命令です。 多くの人達は、旧約聖書の戦争、そして、打ち殺せ、の命令に躓きます。しかし、時代は紀元前千年頃のその時代に生きた人々の考えに立っています。 人間は時代からは、出る事は出来ないと言われています。 神様もその人間の歩みに合わせて、少しずつ、少しずつ人間の意識を導いて来られ、その頂点に、イエス様を世に送られ、イエス様のように考え、生きる事を模範として示されました。 しかし、サウルの生きた時代はまだまだ、

「目には目を、歯には歯を」

と言って戦う時代でした。 そこでサウルは、神様の命令に従ったでしょうか。 いいえサウルは欲を出し、何でも上等な物は惜しんで滅ぼし尽くさず、値打ちの無い物だけを滅ぼし、最上の羊と牛は主への捧げものにするためだとの言い訳をしました。

サムエルはそんなサウルに
向かって15章17節で、

「**あなたは、自分自身の目には取るにたらぬ者と映っているかもしれない。 しかしあなたはイスラエルの諸部族の頭ではないか。**
主は油を注いで、あなたをイスラエルの上に王とされたのだ」

続いて22節、23節に、

「**主が喜ばれるのは、焼き尽くす献げ物や犠牲であろうか。 むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。 見よ、聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは雄羊の脂肪に勝る。 反逆は占いの罪に、高慢は偶像礼拝に等しい。 主の御言葉を退けたあなたは、王位から退けられる**」

と言い渡しました。

この様にサウルは、神様の選びに与ったにも拘わらず、神様に全信頼せず、神様に聴こうとせず、自分の考え、周りの意見に引きずられて判断し、行動しました。 サウルには、神様からの、**選びの尊さ**、その**絶大な価値**が**分かりませんでした**。 それ故に、王として立たされている責任の重さ、全身全霊を以て神様に従う、そこに神様が働いて下さって、**栄光を表して**下さる。**そのために、自分を献げる**と言う**自覚**があませんでした。

ここで一つの疑問は、
『神様には、サウルのその様な不従順は、前もって分からなかったのだろうか』
と言う事です。 実は神様は人間を、
『運命の様に束縛してはおられない』
と言うことです。 神様はわたしたち人間の造り主として、私達を尊び、私達に自由意志を与え、その自発性を尊ばれました。 神様はサウルを見込んで、期待してお選びになったのですが、従順に従うか、従わないかは、**サウルの意志に委ねられた**のです。 ですから、**選ばれた者**は、その**自覚と責任を**もって**答えて行かなければ**な

りません。 サウルは**その事を軽んじた**のです。
神様は最早、
『サウルによってご自身の計画を
進めていくことは出来ない』
とお考えになりました。

そこで**サムエル記上**16章1節を見ますと、
「**主はサムエルに言われた。**
『いつまであなたはサウルの事を嘆くのか。私はイスラエルを治める王位から彼を退けた。 角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。 わたしはその息子達の中に王となるべき者を見出した』」
とあります。 するとサムエルは2節で、
「**どうして私が行けましょうか。 サウルが聞けば、わたしを殺すでしょう**」
と答えました。 サムエルが自分の家ラマから、ベツレヘムに行くには、サウルの居るギブアを通って行かなければなりませんでした。 サウルは今やサムエルに対しても猜疑心を抱いて、神経をとがらせています。 何をするか分からない状態でした。

そこで神様はサムエルの職務である、犠牲獣を献げる、犠牲祭儀を行う様にと言われました。サムエルは繙祭用の若い雌牛を引いてベツレヘムに向かいました。
4節には、
「**彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。**
『おいで下さったのは、平和のことのためでしょうか』」
とあります。 ベツレヘムは小さな村であり、サムエルの来訪は、思いがけない事でした。
長老達が、
『平和なことのためですか』
と案じて聞いているところからすると、
『何か、自分たちは、先見者から、叱責されるようなことをしたのではないか』
と言う、不安を感じたのかも知れません。
サムエルは5節に、
「**平和なことです。 主にいけにえをささげに来ました。 身を清めて、犠牲の会食に一緒に来て下さい**」
と長老達を招きました。

目的のエッサイは、長老でした。 そこで、エッサイと息子達を招待するために、サムエル自身が、エッサイとその息子達を清めた様です。そのためにエッサイの息子達が呼び集められました。 サムエルの眼は長子エリアブに留まりました。 6節に、
「**サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だと思った**」
とあります。 エリアブはきっと背が高く、逞しく、凜々しい姿だったのでしょう。 サムエルの目には、王に相応しく思えたのでした。ところが、サムエルの心を見ておられる神様は、彼の心に語り掛けられました。
「**容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。 人間が見るようには見ない。 人は目に映るところを見るが、主は心によって見る**」
とあります。 あの神様に退けられたサウルこそは、外形的に王に相応しい人物でした。

9章2節によると、サウルは、
「**美しい若者で、彼の美しさに及ぶ者はイスラエルには誰もいなかった。 民の誰よりも肩から上の分だけ背が高かった**」
と記されています。 サムエルは、サウルに失望させられ乍らも、まだ外見に捕らわれていました。
人間には、相手の心が見えません。
ですから、人は誰も
『人前では、良く見せようと繕います』
繕うと言う事は、
『既に破れている』
と言う事です。 それは自分自身をも偽っている事です。 神様が求めておられるのは、**神様に全信頼する無垢な心**です。 神様は心を見ておられると言う事は、外見に囚われてはならない、つまり、
『**外見は本質ではない**』
と言うことです。 神様が見ておられるのは常に心であり、神様に対する信頼度を見ておられます。

長男に続いて次男、三男、そして、七男までサムエルの前に立たされたのですが、神様から

の示しはありませんでした。 そこで11節で、サムエルはエッサイに尋ねました。

「**あなたの息子はこれだけですか。**」
「**末の子が残っていますが、**
今、羊の番をしています。」

とエッサイが答えると、サムエルは

「**人をやって彼を連れて来させて**
ください。 その子が来ないうちは、
食卓には着きません」

と言っています。 末の子はまだ、祭儀の席に座れる年令に達して居なかったのかも知れません。エッサイにとっても、羊の番をさせる必要があったのでしょう。 末の子は軽んじられていました。

その末の子を呼びにやらせ、彼が戻ってきました。 12節には、

「**彼は血色が良く、目が美しく、**
姿も立派であった」

とあります。 末の子は外見も素晴らしかったのです。 それ以上に、神様に対する絶対的信頼を抱き、無垢な心の持ち主でした。 その事は次第に明らかになっていきます。

「**主は言われた。**
『立って彼に油を注ぎなさい。
これがその人だ。』」
「**サムエルは油の入った角を取り出し、**
兄弟たちの中で彼に油を注いだ」

とあります。 兄弟たちも、ダビデ自身にも、この油注ぎが、何の為の油注ぎであるか、サムエルは証していません。 ダビデが正式に王としての油注ぎを受けるのは、まだ、時を経て、サウルの死後、**サムエル記下**の2章4節で、

「**ユダの人々はそこに来て、ダビデに**
油を注ぎ、ユダの家の王とした。」

その時まで待つ事になります。 しかし、

「**その日以来、主の霊が激しく**
ダビデに降るようになった」

とあります。 神様は霊を注ぎ、彼をお用いになり、イスラエルの王へと、お導きになるのです。ここで初めて、末の子の名は、ダビデ（その意味は、愛される者）であることが明らかにされました。彼の生涯は、何時も**神様第一**で、**神様に絶対的信頼**を置いて、神様に聞き従い、神様の御前に生きる生き方を生涯貫きました。

心が迷い、重大な罪を犯してしまいましたが、彼はまた、心から神様に悔い改め、唯一途に**神様の御前**に、**生き抜き**ました。 ダビデの偉さは、常に神様第一に、自分の心を見ておられる、神様の前に生きた事です。

神様は、ご自身の前に生きる人を求め、その人達を選び、ご自身の**人類救済**の**歴史**を、**イエス・キリストへと導いて**行かれます。 今日私達がイエス・キリストの御救いに招かれ、選ばれたのは、ダビデと同じ様に、 神様を**第一**に、その心を見ておられる神様の **御前に生き**て、神様に**聞き従い**、イエス・キリストを**証する**事です。私達も神様に**選ばれ**ている**自覚**と、**責任**を新たに、人の前を繕うのではなく、**神様の御前に生きる生き方ができるよう、聖霊の助けと導きを求めつつ**、この事に励んで参りましょう。

お祈りをいたします。
憐れみ深い天の父なる神様

私達は神様に招かれ、選ばれてイエス・キリストの尊い御救いに入れられているにも拘わらず、尚、人の目を気にし、人前を繕って生きている者です。

どうぞ常に、心を神様に向け、神様に選ばれている自覚と、責任に生きる者と成らせて下さい。上からの聖霊による助けと導きを、お与え下さる様にお願い致します。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。